秋　田　市

久　保　田　城　跡

―表門復元に伴う発掘調査報告書―

2001.3 秋田市教育委員会

遺跡遠景（北→　平成9年調査時撮影）

表門跡（北西→　平成9年調査時撮影）

表門跡（北東→）

表門跡掘り方 No.1（南東→）
礎石・柱発見状況

序

市民の憩いの場として親しまれている千秋公園は、秋田藩主佐竹氏の居城（久保田城）としてそのなごりを今日に伝えております。

秋田市は、昭和56年に「千秋公園整備基本計画」を策定して公園を整備してきましたが、時代の要請に応えながら市民に親しまれる公園づくりを目指すために、平成８年度に「千秋公園再整備基本計画」を策定いたしました。また、平成９年度には都市公園整備事業によって久保田城跡の表門とその周辺整備が計画され、表門復元のための発掘調査を実施しました。さらに、平成12年度に表門復元に伴う掘削工事の立会調査を行ったところ初期の表門跡と考えられる遺構が発見されるなど、新たに貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、その立会発掘調査成果をまとめたものであり、文化財保護のため、さらには近世城郭の研究資料として広く活用されることを願っております。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成にご指導、ご協力くださいました関係者の皆様に深く感謝申しあげます。

平成13年３月

秋田市教育委員会
教育長　石　黒　俊　郎

例　　言

1　本報告書は、久保田城跡（秋田市千秋公園）の表門復元に伴う工事立会時の発掘調査報告書である。

2　本報告書の執筆は、安田忠市、伊藤武士、中川宏行が行い、安田が編集した。

3　遺跡の地形・地質は、「土地分類基本調査　地形・地層地質・土じょう　秋田　経済企画庁総合開発局国土調査課　1966年3月」を参照した。

4　発掘調査による出土遺物・実測図・写真・その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要…… 1

調査に至るまでの経過…… 1

調査期間と体制…… 1

調査の方法と経過…… 1

遺跡の位置と地形・地質…… 3

近世の周辺遺跡…… 3

久保田城跡の概要…… 4

調査地の歴史的変遷…… 7

調査の記録…… 9

基本土層…… 9

発見遺構…… 9

出土遺物…… 13

まとめ…… 17

調査の概要

調査に至るまでの経過

秋田市は昭和56年に「千秋公園整備基本計画」を策定し、これまで千秋公園の整備・管理をしてきた。しかし、市民意識の変化、公園をとりまく市街地の状況の変化等から公園に求められる機能の見直しが急務となり、秋田市都市開発部公園建設課は市民の財産として位置づける千秋公園が市民に親しまれる魅力的な公園づくりを目指すために、学識経験者と行政側委員等による「千秋公園再整備計画策定委員会」によって、平成９年２月に「千秋公園再整備基本計画」を策定した。

平成９年度から都市公園整備事業により、久保田城跡の表門とその周辺整備を計画していることから、平成９年に表門復元のための発掘調査を実施した。そして、今回表門復元に伴う工事立会時の発掘調査を実施し、本報告書はその成果をまとめたものである。

調査期間と体制

調査期間　平成12年５月８日～５月16日

調査面積　約200㎡

調査主体者　秋田市都市開発部公園建設課

調査担当者　秋田市教育委員会

調査体制　秋田市教育委員会文化課

文化課　課　長　小松正夫

課長補佐　小国裕実

文化財担当

主席主査　鎌田照平

主　査　安田忠市（調査担当）

主　事　伊藤武士（調査担当）

主　事　中川宏行（調査担当）

調査協力者　株式会社齋藤組、建友土建株式会社、長谷部建設株式会社

調査の方法と経過

グリッドは平成９年調査時のものを活かし、南北基線とこれに直交する東西基線を作り、そこから４×４ｍのグリッドを設定した。そして、東西方向（Ｘ軸）に西から数字（１、２、３・・・・）を、南北方向（Ｙ軸）にアルファベット（Ａ、Ｂ、Ｃ・・・・）を南から配し、その組み合わせをグリッド名とした。

調査は５月８日から５月16日の日程で実施し、表門復元事業の業者の協力を得て遺構検出作業と併行して実測と写真によって記録化した。

0　1:50,000　2,000m

第１図　遺跡の位置

遺跡の位置と地形・地質

遺跡の位置

遺跡は秋田市街地のほぼ中央部にあたる秋田市千秋公園（久保田城跡を公園として整備）に所在し、秋田駅の北西約700mの地点である。

北緯39°43′10″、東経140°7′37″で、日本海から約5.5km内陸へ入った地点で、西側に旭川が流れている。

遺跡の地形・地質

遺跡は地形区分では台地にあたり、千秋公園台地と呼ばれている。千秋公園の北東側約1.3kmに位置している手形山から古旭川（現在の旭川は久保田城築城によって掘り替えた川）の浸食によって切断されたと考えられる独立台地である。標高は40m前後であるが、3段の段丘（40、35、25m）からなっている。

千秋公園は手形山台地と同様に第四系の礫層や含礫砂層（潟西層）からなり、構成物質は最上部に1～2mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に最大径10cm前後の礫を含む礫層と砂層が30cm以上あり、これらがその下部の第三系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）を厚く覆っている。なお、砂礫の部分では所々にクロスラミナがみられ、砂の部分は水平で細かい層理を示している。

また、この地形面は八郎潟周辺や雄物川支流の岩見川沿いにも広く発達している。

近世の周辺遺跡（第3図）

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した秋田市遺跡詳細分布調査報告書[注1]に基づいて、近世の周辺遺跡を概観してみたい。

近世の遺跡は、久保田城跡の北東約1.3kmに平田篤胤墓（5）、南東約2.1kmに金照寺山一ッ森遺跡（8）、南西約2.1kmに鋳砲所跡（11）、西約2kmに八橋一里塚（12）などがある。平田篤胤墓[注2]（国指定史跡）は国学四大人の一人である平田篤胤（1776～1843）の墓である。金照寺山一ッ森遺跡[注3]は昭和50年にマイクロウェーブ回線中継所新設に伴う緊急発掘調査が秋田考古学協会によって実施され、調査の結果、墳丘状盛り土・掘立柱建物跡・溝跡と、江戸時代初期の唐津焼の小皿、江戸時代中期の七輪、寛永通宝などが発見されている。なお、墳丘状盛り土については、古墳などの遺構ではなく、性格は不明であるが江戸時代の構築と考えられている。鋳砲所跡は大砲を鋳造する施設として、秋田藩が安政6年（1859）に建てた所である。八橋一里塚は慶長9年（1604）に江戸日本橋を起点として主要街道に一里ごとに築かれた塚で、八橋一里塚は日本橋から143里である。なお、北側約2kmには秋田藩主佐竹氏の菩提寺である天徳寺（重要文化財）が、北西約3.7kmには近世陶磁器・瓦・煉瓦の窯跡である寺内焼窯跡[注4]が位置している。

また、久保田城下には侍町（内町）・町人町（外町）・寺町を配しているが、旧東根小屋町（中通一丁目）に位置していた藩校明徳館跡（1）を市街地再開発事業に伴って緊急発掘調査を平成12年度に実施し、江戸・明治期の遺構・遺物を発見している。なお、整理作業は平成13年度に行う予定である。

注1　『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』　秋田市教育委員会　1989年3月

注２　『秋田県の文化財』 秋田県教育委員会　1989年３年

注３　『秋田市金照寺山一ツ森遺跡発掘調査報告書』 秋田考古学協会　1976年２月

注４　『寺内焼窯跡　－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査－』 秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所　1991年３月

久保田城の概要

久保田城は、秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。

慶長７年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初旧領主秋田実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから、家臣団の居住地の確保と諸施設の建設用地等の収容能力的な問題や、防御的な不安などから新城を築くこととなった。そして、寺内山と久保田神明山を移転の候補地としてあげ、実地検分の結果、仁別川（旭川）を西方へ移すことを前提に久保田神明山を選定し、転封の翌年である慶長８年（1603）５月に着工した。神明山には川尻村の肝煎である豪族三浦氏（後に川尻氏）の氏神の神明社（後に川尻の総社神社）や数軒の人家があったが、それぞれ移転させている。そして、城は未完成であったが約１年後の同９年（1604）８月28日には湊城を破却して新城へ移り、それ以降も継続して城の整備を図った。

久保田城は、本丸及び二の丸・三の丸・北の丸からなっている。本丸は東西65間（約117m）、南北120間（約215m）で、藩主の住居である本丸御殿や政務所等が置かれ、城の中枢である。本丸は台地の最も高台に位置し、一面を平らにして外周には土塁を巡らし、土塁の間には４箇所の門（表門・裏門・帯曲輪門・埋門）と５箇所の切戸口を設けていた。そして、門を除く土塁の上には多聞長屋を建て、多聞長屋のない部分は板塀となっているなど、厳重に守り固めていた。また、北西隅にお隅櫓（新兵具蔵ともいう）、南西隅に御出し書院が置かれていた。

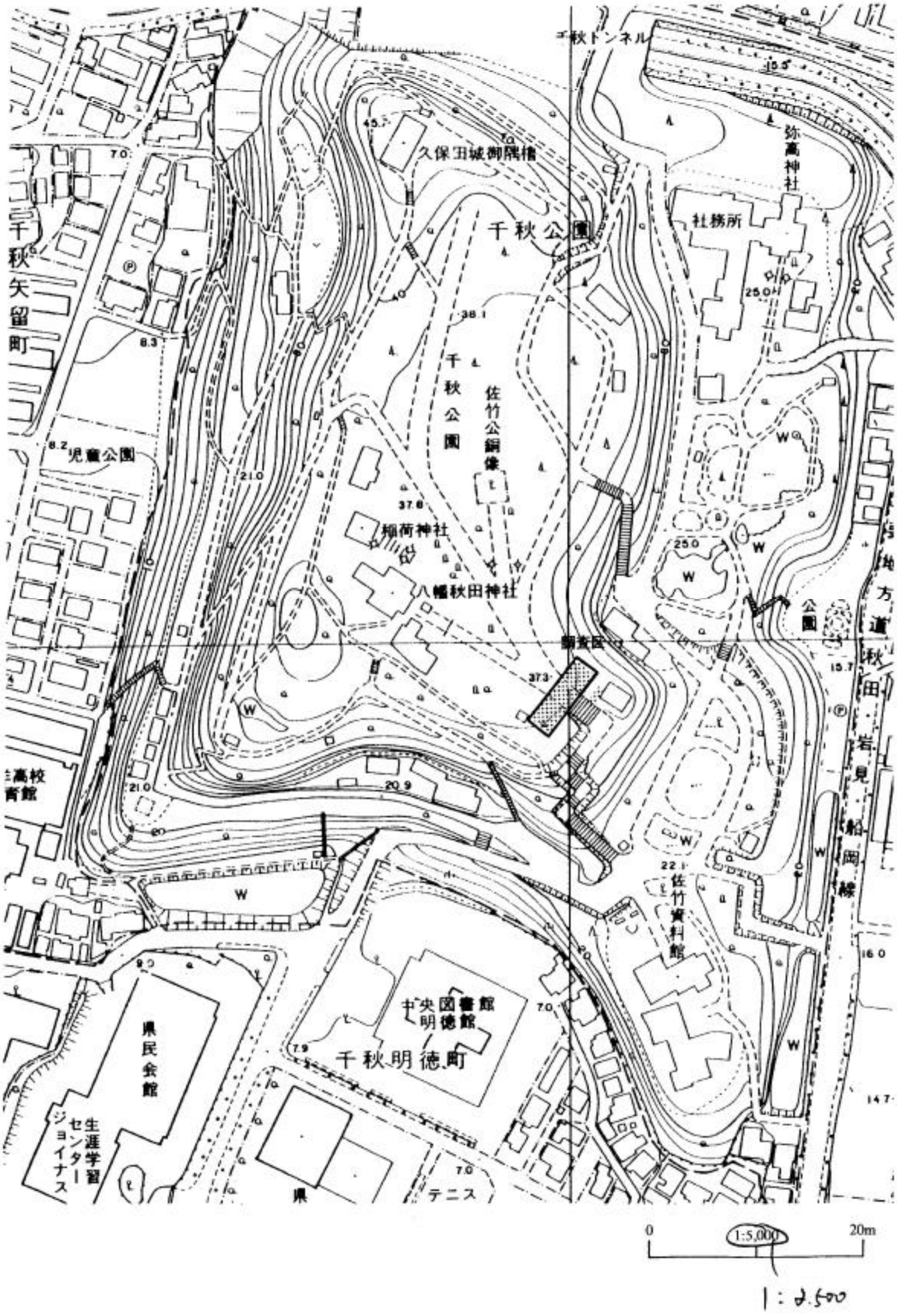
二の丸は東西39間（約70m）、南北240間（約432m）で、諸役所（境目方役所･勘定方役所等）や金蔵・厩等が置かれていた。この二の丸は本丸の正面としての玄関口にあたり、外部からの道は全てここに集まり、内堀を渡る橋４箇所には門（黒門・松下門・不浄門・土門）を設け、足軽番所を置いて警備していた。

三の丸は二の丸の北側に位置する現在の彌高神社後方の堀と北の丸の間の細長い高台である。東部を上中城、南部を下中城、北東部を山の手といい、家老級の重臣の屋敷等が置かれていた。また、山の手の西に続く台地は、佐竹氏の氏神である八幡宮の境内であり、八幡山と呼ばれていた。

北の丸は城域の北端に位置し、二の丸から長橋を渡って北へ進んだ所で、籾蔵や大木屋等が置かれていた。

また、久保田城下の町割りについては、侍町（内町）と町人町（外町）を画然と分離し、町人町の外側に寺町を配して整備した。

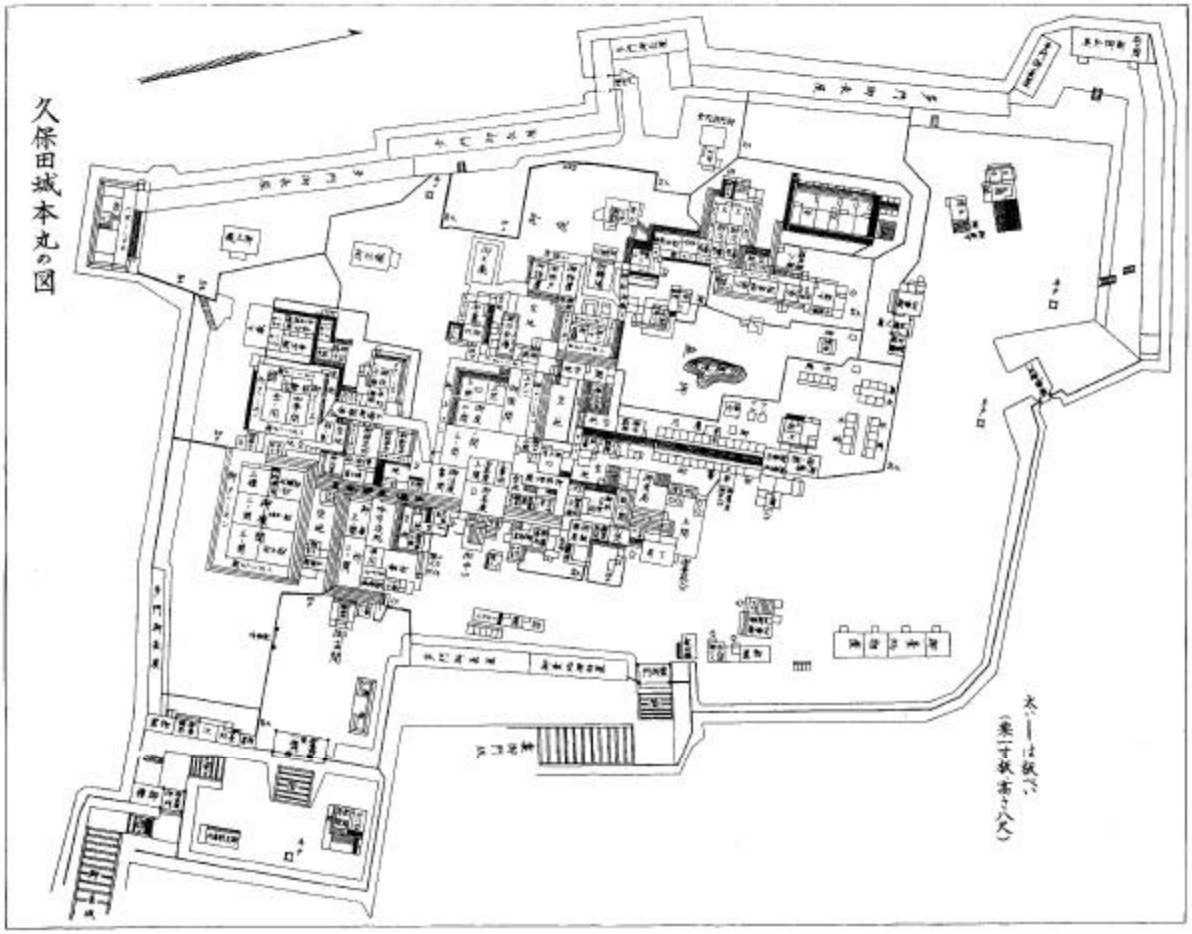
久保田城は秋田藩主佐竹氏の居城であったが、明治４年の廃藩置県後に陸軍省の所管となった。そして、同23年に旧藩主の佐竹氏に払下げとなり、翌24年に秋田市が借り上げて公園とし、同28年に県に移管されて整備された。その後、昭和28年に再び秋田市に移管され、現在千秋公園として市民に開放されている。



第2図　久保田城跡の地形

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物
1	藩校明徳館跡	秋田市中通一丁目	城下町(学校)	近世	井戸跡・溝跡・柱列（近世）掘立柱建物跡・礎石建物跡（近代）・陶磁器、木製品
2	柳沢	秋田市広面字柳沢	集落跡	縄文	竪穴住居跡8軒・土坑1基,縄文土器(円筒下層a～d式)・石鏃・偏平打製石器・磨製石斧
3	蛇野	秋田市手形字蛇野	遺物包含地・城館	縄文・奈良平安・中世	石器・赤褐色土器
4	桜田郷内	秋田市広面字赤沼	遺物包含地	縄文	縄文土器片（後期）
5	平田篤胤墓	秋田市手形字大沢	墓地	近世	
6	香奇館	秋田市東通明田	城館	中世	帯郭・腰郭
7	七ツ森	秋田市楢山金照町	塚		塚
8	金照寺山一ツ森	秋田市楢山金照町	塚	近世	墳丘状盛り土・掘立柱建物跡、唐津焼・寛永通宝
9	一ノ坪条里制遺構	秋田市保戸野八丁、星一ノ坪外	条里制遺構	奈良・平安	
10	鍋子山	秋田市川元松丘町	遺物包含地	縄文	縄文土器
11	鋳砲所跡	秋田市山王六丁目	遺物包含地	平安・近世	赤褐色土器・須恵器・鉄滓
12	八橋一里塚	秋田市八橋本町一丁目	一里塚	近世	

第3図　久保田城跡と周辺の遺跡



（「秋田沿革史大成」付録）

第４図　秋田御城内御座敷廻絵図

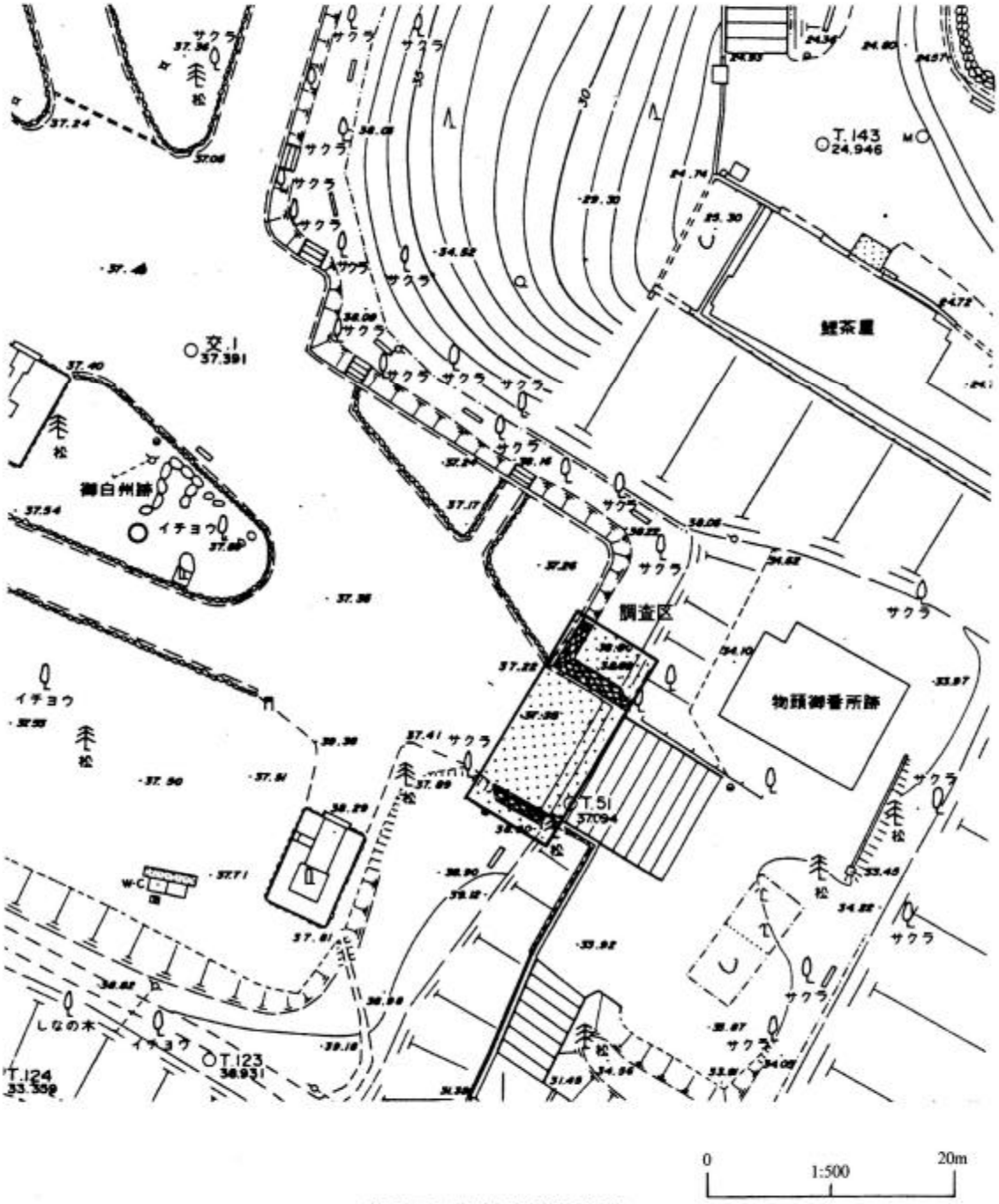
調査地の歴史的変遷

表門は本丸の玄関口として重要な門であり、城の象徴として壮大であったと考えられる。表門の建て替えに関する記述として、梅津政景日記の元和５年（1619）５月の条に「おもて御門柱ほそく候共、急度立申候て、古御門をハたゝませ指置可申由、御意之段、」とあり、この指示によって再建している。そして、羽陰史略の元和８年（1622）６月の条に「表御門長さ十三間、横五間二階御門御材木槻、去暮御請合八百三十両。御普請方信太兵部、久賀谷五郎兵衛、田崎善助。十二月成就。」とあり、元和５年の指示によって建て替えた表門が３年後の元和８年に完成している。

久保田城は慶長８年に築城してから、本丸は３度大火に遭っている。第１回目は寛永10年（1633）９月21日で、本丸から出火して全焼している。表門は元和８年（1622）に建て替えられているが、表門や周囲の施設もほとんど消失した。すぐに再建に取りかかり、翌11年に完成している。また、安永５年（1776）４月２日に外町（大町六丁目）から出火し、表門に燃え移ったが幸いなことに消し止めている。

第２回目は安永７年（1778）である。本丸奥の鈴の間から出火し、本丸が全焼している。この時焼け残ったのは帯曲輪門・帯曲輪門上の隅櫓・長坂門などであり、表門は「出羽国秋田居城絵図」では焼失したことになっているが、「国典類抄凶部」によると焼失を免れたことになっている。そして、天明年間には表門の横にある御番頭局が焼けている。

第３回目は明治13年（1880）７月19日である。この時、本丸は全焼したが、裏門と表門の下にある御物頭御番所だけが焼け残っている。そして、裏門は鱗勝院（旭北栄町）の山門として移築し、御物頭御番所（市指定文化財）は現存する唯一の建造物として現在秋田市が保存・管理している。

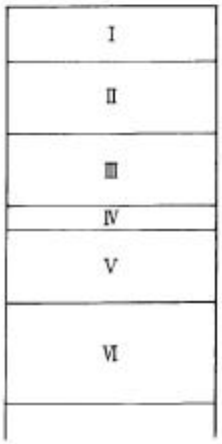


第５図　調査区周辺の地形

調査の記録

基本層序（第６図）

第Ⅰ層　小粒の玉砂利、第Ⅱ層　暗褐色土に小礫が混入、第Ⅲ層　黄褐色土と明黄褐色粘土の混じりに小礫が混入、第Ⅳ層　焼土、第Ⅴ層　黄褐色土に小礫が混入、第Ⅵ層明黄褐色の砂礫層である。第Ⅰ層が散策路に敷いた玉砂利、第Ⅱ層から第Ⅴ層は整地層、第Ⅵ層は地山、第Ⅳ層は焼土であることから火災の痕跡と考えられる。



第６図　基本土層柱状図

発見遺構

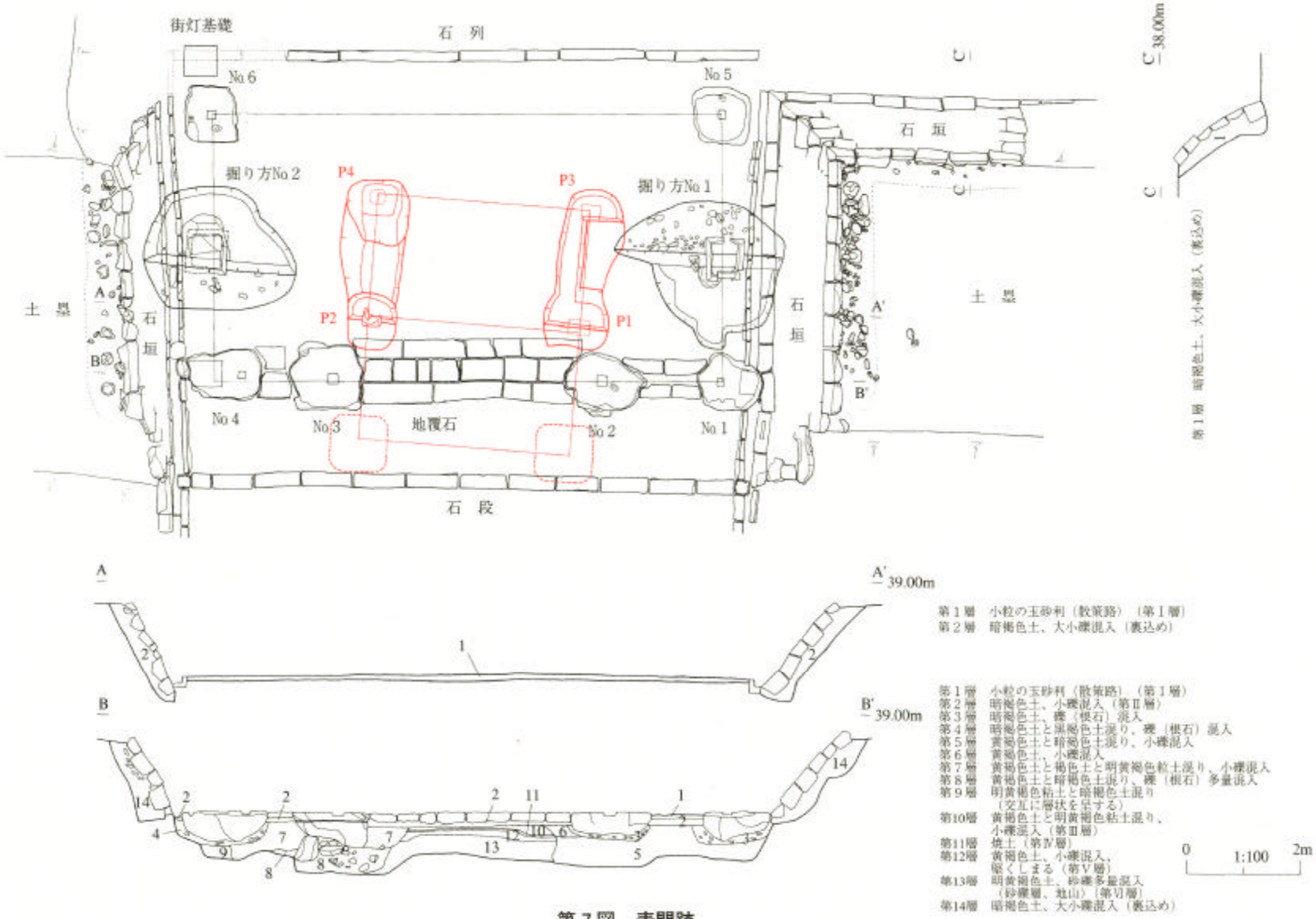
表門跡（第７、８図）

平成９年度の調査で確認された表門跡の礎石の他に、今回の調査で柱の掘り方を新たに２基発見した。掘り方No１は礎石No１と礎石No５の間、掘り方No２は礎石No４と礎石No６の間に位置する。掘り方No１は長軸３ｍ、短軸2.6ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.6ｍである。掘り方の上部には一辺80cm、幅10cm、長さ約80cmの柱を囲む石の枠が据えられており、上面は外側が斜めに加工されていた。そして確認面から深さ約1.4ｍ下部には礎石が据えられていた。礎石は径90cmの楕円形を呈し、厚さは20cmで、一辺７cm、深さ４cmのほぞ穴が認められる。上面は平坦に加工されているが、下面は不整形である。礎石の上には一辺40cmの角柱が60cm残存しているが、かなり腐食が進行していた。掘り方No２は長軸2.7ｍ、短軸2.2ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.7ｍである。掘り方上部には掘り方No１と同様に一辺80cm、幅10cm、深さ約70cmの柱を囲む石の枠が据えられており、上面は外側が斜めに加工されていた。そして確認面から深さ約1.4ｍ下部には礎石が据えられていた。礎石は径80cmの楕円形を呈し、厚さは20cmである。上面は平坦に加工されているが、下面は不整形である。礎石の上には高さを調整したと考えられる一辺60cm四方、厚さ10cmの石製礎板が据えられていた。

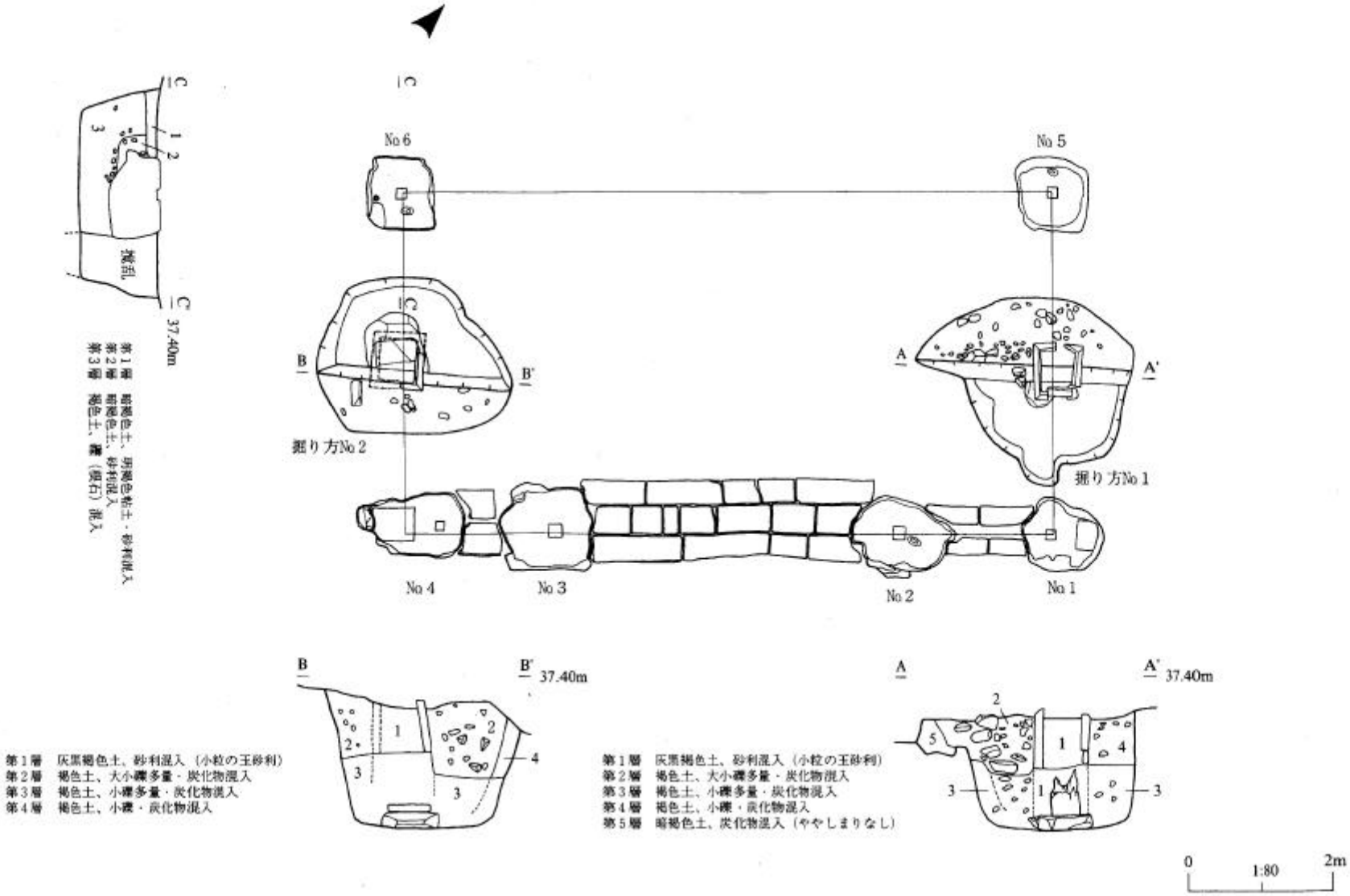
今回の調査で２基の掘り方が発見されたことから、柱間は桁行が正面３間（2.1+4.9+2.1ｍ）、背面１間（9.1ｍ）、梁間は２間（2.4+2.4ｍ）であることが判明した。

表門跡（旧）（第７、９図）

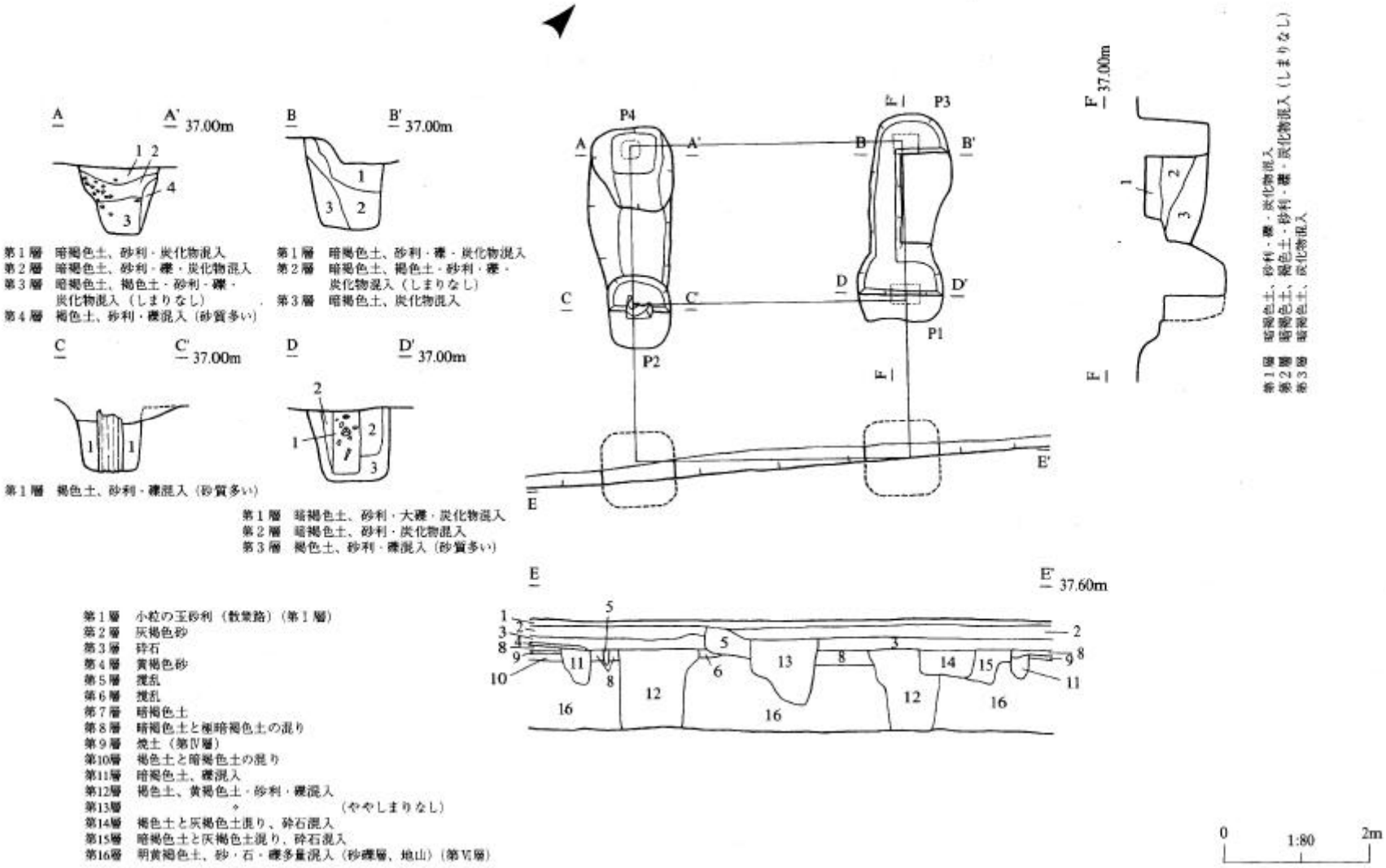
平成９年度に調査した表門跡の下層から柱穴を６基確認した。４基は平面で、２基は南東側の断面で確認し、桁行１間（3.7ｍ）、梁間２間（2.2+2.2ｍ）である。Ｐ１は径1.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは１ｍである。Ｐ２は径90cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは70cmで、一辺30cmの角柱が80cm残存していたが、かなり腐食が進行していた。Ｐ３は径１ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.2ｍで、底面に柱の痕跡（一辺30cm）が認められた。Ｐ４は径1.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは90cmで、底面に柱の痕跡（一辺30cm）が認められた。


街灯基礎
石 列
No 6
No 5
石 垣
掘り方No 2
P4
P3
掘り方No 1
土 墨
A
B
石 垣
P2
P1
石 垣
A'
B'
土 墨
No 4
No 3
地覆石
No 2
No 1
石 段
C
38.00m
第1層 暗褐色土、大小礫混入（裏込め）
A
A' 39.00m
B
B' 39.00m
第1層 小粒の玉砂利（敷策路）（第Ⅰ層）
第2層 暗褐色土、大小礫混入（裏込め）
第1層 小粒の玉砂利（敷策路）（第Ⅰ層）
第2層 暗褐色土、小礫混入（第Ⅱ層）
第3層 暗褐色土、礫（根石）混入
第4層 暗褐色土と黒褐色土混り、礫（根石）混入
第5層 黄褐色土と暗褐色土混り、小礫混入
第6層 黄褐色土、小礫混入
第7層 黄褐色土と褐色土と明黄褐色粒土混り、小礫混入
第8層 黄褐色土と暗褐色土混り、礫（根石）多量混入
第9層 明黄褐色粘土と暗褐色土混り
（交互に層状を呈する）
第10層 黄褐色土と明黄褐色粘土混り、
小礫混入（第Ⅲ層）
第11層 焼土（第Ⅳ層）
第12層 黄褐色土、小礫混入、
硬くしまる（第Ⅴ層）
第13層 明黄褐色土、砂礫多量混入
（砂礫層、地山）（第Ⅵ層）
第14層 暗褐色土、大小礫混入（裏込め）
0
1:100
2m

第7図　表門跡


No 6
No 5
No 4
No 3
No 2
No 1
掘り方No 2
掘り方No 1
C
C'
37.40m
撹乱
第1層　暗褐色土、明褐色粘土・砂利混入
第2層　明褐色土、砂利混入
第3層　褐色土、礫（鉄石）混入
B
B'
37.40m
第1層　灰黒褐色土、砂利混入（小粒の玉砂利）
第2層　褐色土、大小礫多量・炭化物混入
第3層　褐色土、小礫多量・炭化物混入
第4層　褐色土、小礫・炭化物混入
A
A'
37.40m
第1層　灰黒褐色土、砂利混入（小粒の玉砂利）
第2層　褐色土、大小礫多量・炭化物混入
第3層　褐色土、小礫多量・炭化物混入
第4層　褐色土、小礫・炭化物混入
第5層　暗褐色土、炭化物混入（ややしまりなし）
0
1:80
2m

第8図　表門跡


A
A' 37.00m
第1層　暗褐色土、砂利・炭化物混入
第2層　暗褐色土、砂利・礫・炭化物混入
第3層　暗褐色土、褐色土・砂利・礫・炭化物混入（しまりなし）
第4層　褐色土、砂利・礫混入（砂質多い）
B
B' 37.00m
第1層　暗褐色土、砂利・礫・炭化物混入
第2層　暗褐色土、褐色土・砂利・礫・炭化物混入（しまりなし）
第3層　暗褐色土、炭化物混入
C
C' 37.00m
第1層　褐色土、砂利・礫混入（砂質多い）
D
D' 37.00m
第1層　暗褐色土、砂利・大礫・炭化物混入
第2層　暗褐色土、砂利・炭化物混入
第3層　褐色土、砂利・礫混入（砂質多い）
P1
P2
P3
P4
F' 37.00m
第1層　暗褐色土、砂利・礫・炭化物混入
第2層　暗褐色土、褐色土・砂利・礫・炭化物混入（しまりなし）
第3層　暗褐色土、炭化物混入
E
E' 37.60m
第1層　小粒の玉砂利（敷葉路）（第1層）
第2層　灰褐色砂
第3層　砕石
第4層　黄褐色砂
第5層　攪乱
第6層　攪乱
第7層　暗褐色土
第8層　暗褐色土と極暗褐色土の混り
第9層　焼土（第Ⅳ層）
第10層　褐色土と暗褐色土の混り
第11層　暗褐色土、礫混入
第12層　褐色土、黄褐色土・砂利・礫混入
第13層　〃　（ややしまりなし）
第14層　褐色土と灰褐色土混り、砕石混入
第15層　暗褐色土と灰褐色土混り、砕石混入
第16層　明黄褐色土、砂・石・礫多量混入（砂礫層、地山）（第Ⅵ層）
0
1:80
2m

第9図　表門跡（旧）

出土遺物

遺物は調査区表採、表土、遺構に伴って出土したものである。種類は陶器・瓦・金属製品である。

陶器（第10図１）

甕の胴部破片である。外面に茶褐色を呈する釉が薄くかかっている。表門礎石№１据え方掘り込み埋土出土である。

瓦（第10、11図２～15）

本瓦葺きに使用された丸瓦・平瓦・軒平瓦、桟瓦葺きに使用された軒桟瓦・桟瓦、道具瓦として使用された熨斗瓦である。

２、３は表門礎石№１据え方掘り込み埋土出土、６は表門礎石№２据え方掘り込み埋土出土、11は表門礎石№３据え方掘り込み埋土出土、４、12は表門礎石№４据え方掘り込み埋土出土、５、７は表門礎石№４直下出土、13は表門掘り方№２の石枠埋土下層出土、８、９は表採、10、14、15は表土出土である。

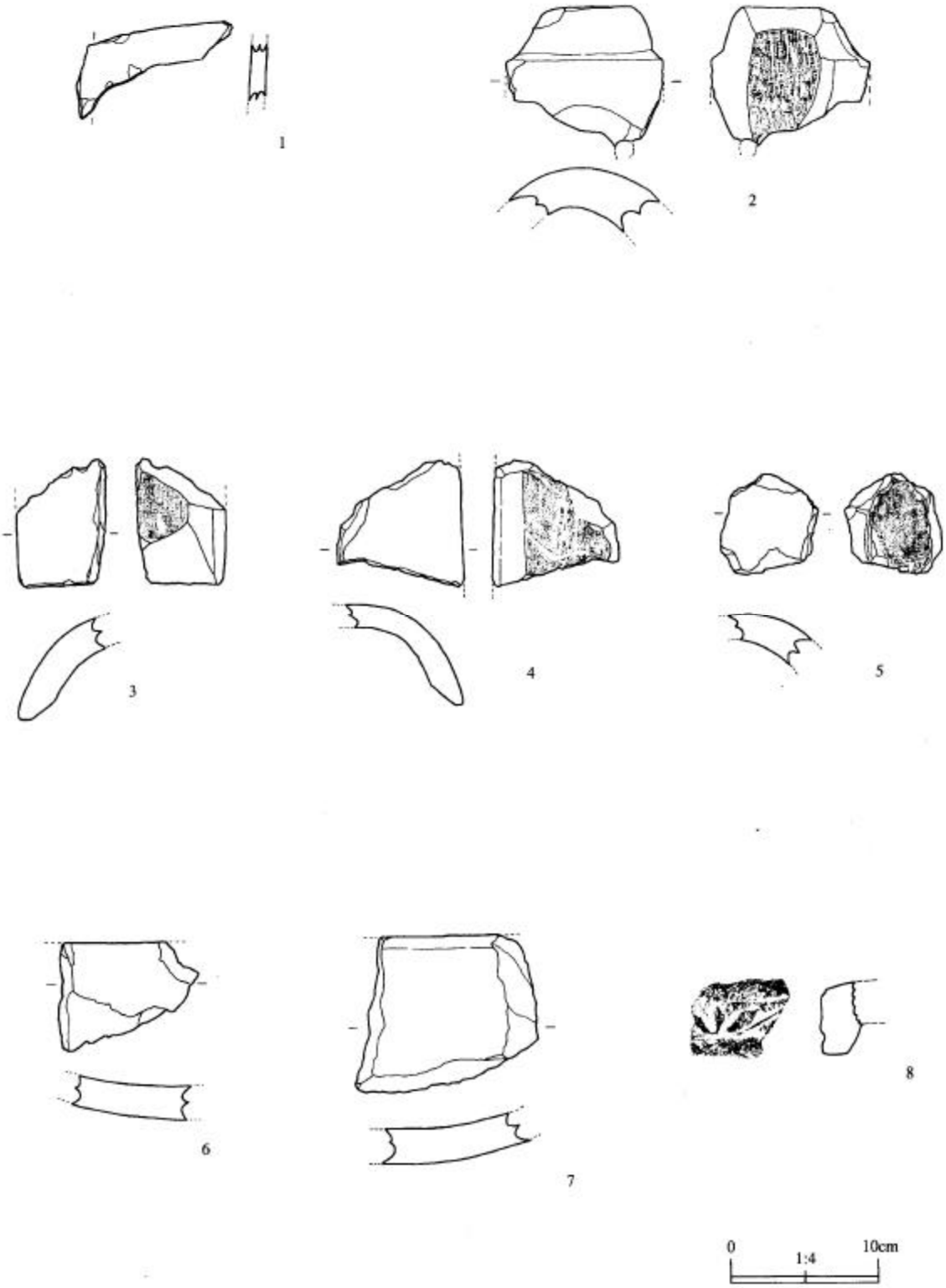
２～５は丸瓦である。２は丸瓦の玉縁部分で、釘穴が一箇所と内面に布目圧痕が認められる。３～５も内面に布目圧痕が認められる。６、７は平瓦で端部は面取りを行い、上面・下面とも丁寧なナデ調整を行う。８は軒平瓦の瓦当部分である。瓦当面には緑色の釉がかかる。９は軒桟瓦で、瓦当の文様は唐草文である。10は桟瓦の丸瓦部である。11は桟瓦の平瓦部分である。12は桟瓦の平瓦部分と考えられるが、貫通していない釘穴が１箇所あり、道具瓦の可能性もある。13は熨斗瓦と考えられ、側面に焼成前の分割痕が認められる。14、15は桟瓦の平瓦部分である。

２～13はいぶし瓦で、14、15は赤瓦である。２、13は特に須恵器質の焼成と色調を呈し、その他は灰色～黒色を呈する。14、15は暗赤褐色を呈する。５、15には二次加熱を受けた痕跡が認められる。

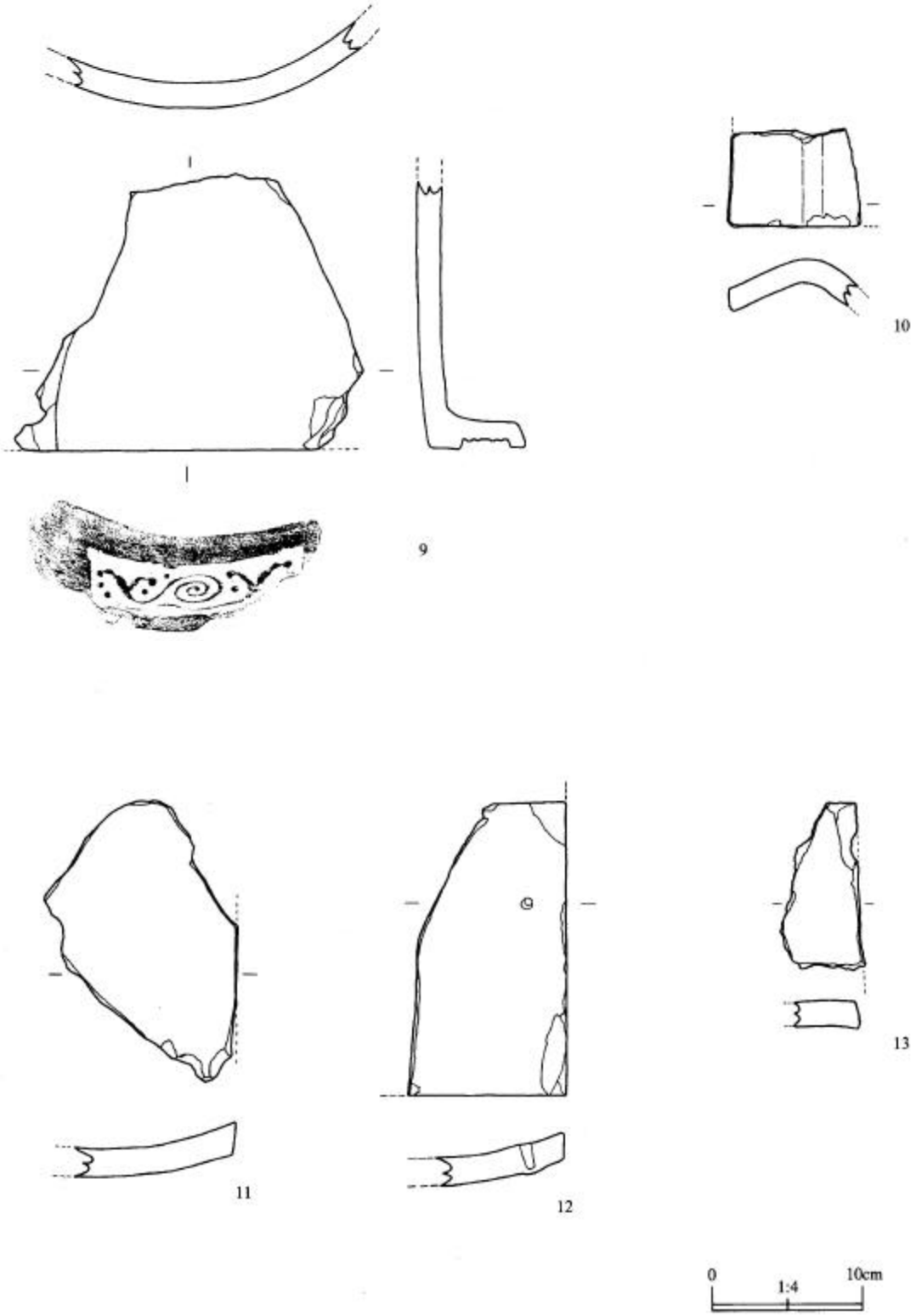
金属製品（第12図16～22）

16は鉄製の釘である。17～21は銅製の釘で、平丸頭の形態である。22は鉄製の飾り金具と考えられ、門扉の乳金物と考えられる。

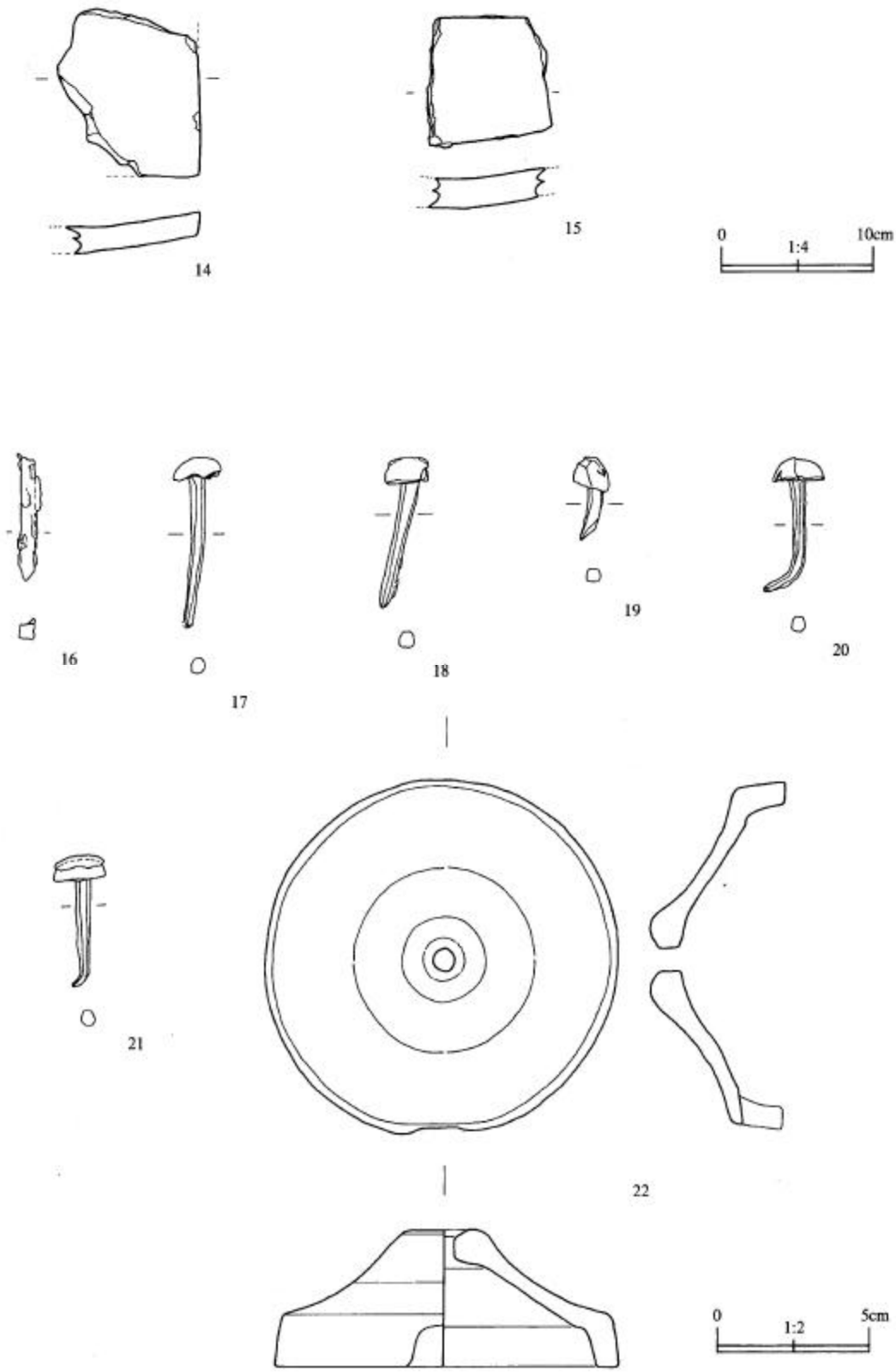
16、17は表門（旧）掘り方№１埋土出土、18は表門礎石№１、２据え方掘り込み埋土出土、19は表門掘り方№２の埋土中層出土、20は表採、21、22は表土出土である。



第10図　出土遺物



第11図　出土遺物



第12図　出土遺物

まとめ

久保田城は秋田平野のほぼ中央部に位置し、現在の千秋公園を中心とした一帯である。

これまで久保田城跡の発掘調査は、昭和63年度に御隅櫓復元に伴う発掘調査[注1]、平成３年度に佐竹史料館増築に伴う発掘調査[注2]、平成４年度に黒門復元に伴う発掘調査[注3]を実施している。そして、平成９年度には表門復元に伴う発掘調査[注4]が実施され、表門に伴う礎石・地覆石・石列・土塁・石垣が確認された。礎石は６基確認され、桁行は正面３間（2.1+4.9+2.1m）、背面１間（9.1m）、梁間１間（4.8m）で、表門の最終段階は礎石柱であったと考えられている。礎石の配置については、調査結果と藩政末期の「秋田御城内御座敷廻絵図」とは一致するが、この絵図の原本とされる「御城内御座敷廻絵図」によると、表門の礎石配置は梁間が２間と標記されており、課題となっていた。

今回の調査は、表門復元に伴う工事立会時の発掘調査で、調査の結果、新たに礎石が伴う表門の柱掘り方とそれよりも古い柱穴と柱が確認された。礎石が伴う柱掘り方は２基確認された。掘り方№１は礎石№１と礎石№５の間に、掘り方№２は礎石№４と礎石№６の間に発見され、平成９年度に確認された表門の礎石柱と一体のもので、掘り方の底面に礎石を据えた掘立の親柱であったと考えられる。そして、柱を囲んでいた石の枠は、上面の外側を斜めに加工していることなどから上部は露出していたと推測される。礎石及び柱掘り方は焼土層より上で確認されていることから、表門が焼失[注5]した後に再建されたと考えられる。これらのことから、桁行は正面３間、背面１間、梁間２間であると考えられ、「御城内御座敷廻絵図」に描かれている表門の柱配置と一致する。

また、柱穴は礎石が伴う表門の確認面よりも下から６基発見された。桁行１間（3.7m）、梁間２間（2.2+2.2m）で、建物方位は上層で確認された表門とほぼ同方向であることと、確認面が焼土層の下であることなどから初期の表門と推測され、礎石柱に建て替える以前は掘立柱の四脚門であったと考えられる。これは、梅津政景日記の元和５年（1619）５月の条[注6]によると、表門の最も古い建て替えは元和８年[注7]（1622）と考えられ、この中で、古御門とあるのは慶長８年（1603）から翌年にかけて久保田城を築城した際に建てられた門と考えられ、この建て替えによって礎石柱にしたのではないかと推測される。

遺物は、陶器・瓦・金属製品が出土した。瓦は本瓦葺きに使用された、いぶし瓦の丸瓦・平瓦、桟瓦葺きに使用された、いぶし瓦の軒桟瓦・桟瓦、赤瓦の桟瓦などである。桟瓦はいぶし瓦と赤瓦が前回の調査でも出土しており、ある時期の表門はいぶし瓦又は赤瓦の桟瓦葺きであったと考えられる。今回の調査では、新しい表門の礎石の据え方掘り込みから本瓦葺きに使用された丸瓦・平瓦が出土しており、礎石を伴う表門の建て替えに伴って混入したと考えられることから、建て替え前の表門はいぶし瓦の本瓦葺きであった可能性が考えられる。今回の調査で出土した瓦から、表門の屋根など城内の主要施設は古い段階には本瓦葺きであった可能性が考えられ、今後城内の建物の屋根を検討するうえで参考となる資料である。

秋田藩の瓦の生産について「八丁夜話[注8]」によると文政９年（1826）以前に遡り、寺内・新藤田に瓦座があって瓦の生産を行い、城内で瓦葺きを試したとされている。両座で瓦生産が行われていたが、寺内窯跡[注9]は確認されている。しかし、新藤田については不明であり今後の発見に期待したい。

前回の調査で出土した桟瓦は寺内窯跡の出土瓦に類似していると報告しており、いぶし瓦と赤瓦の桟瓦がほとんどである。しかし、今回の調査では本瓦が出土しており、本瓦の生産や使用した時期、

また生産地なども不明であり、今後検討が必要である。

今回の調査では、初期の表門と考えられる柱穴や柱が、そして礎石が伴う表門の梁間に新たに柱掘り方が発見されたことから梁間が２間であることが判明するなど、貴重な成果を得ることができた。

注１　『久保田城跡　－本丸御隅櫓跡発掘調査報告書－』 秋田市教育委員会　1989年12月

注２　『久保田城跡　－佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書－』 秋田市教育委員会　1992年３月

注３　未報告

注４　『久保田城跡　－表門復元に伴う発掘調査報告書－』 秋田市教育委員会　1997年９月

注５　本丸の火災は３回確認されており、第１回目が寛永10年（1633）、第２回目が安永７年（1778）、第３回目が明治13年（1880）で、安永５年（1776）には外町（大町六丁目）から出火した火が表門に燃え移ったが消し止めている。確認されている焼土層は寛永10年ないし安永７年の火災と考えられるが、安永７年の火災については幕府に提出したとされる「出羽国秋田居城絵図」では焼失したことになっているが、「国典類抄凶部」の記事によると焼失を免れたことになっており、これらのことから寛永10年の火災の可能性が高いが、今後検討が必要である。

注６　「元和五年五月二六日　おもて御門柱ほそく候共、急度立申候て、古御門をハたゝませ指置可申由、御意之段、」『梅津政景日記』 東京大学史料編纂所　（株）岩波書店　1996年10月

注７　「元和八年壬戌　一此年六月より御殿御繕御普請。又表御門長さ十三間、横五間二階御門御材木覗、去暮御普合八百三十両。御普請方信太兵部、久賀谷五郎兵衛、田崎善助。十二月成就。」『新秋田叢書（一）』「羽陰史略前編」 歴史図書社　1971年６月

注８　『第二期　新秋田叢書（一）』「八丁夜話（一）」 歴史図書社　1972年10月

注９　『寺内窯跡　－寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査－』 秋田市教育委員会　1991年３月

調査前（北西→　平成9年調査時撮影）

調査区（北西→　平成9年調査時撮影）

図版 1

調査区（南東→　平成9年調査時撮影）

表門跡（北西→　平成9年調査時撮影）

図版 2

礎石No.3断ち割り

礎石No.3根石

礎石No.6断ち割り

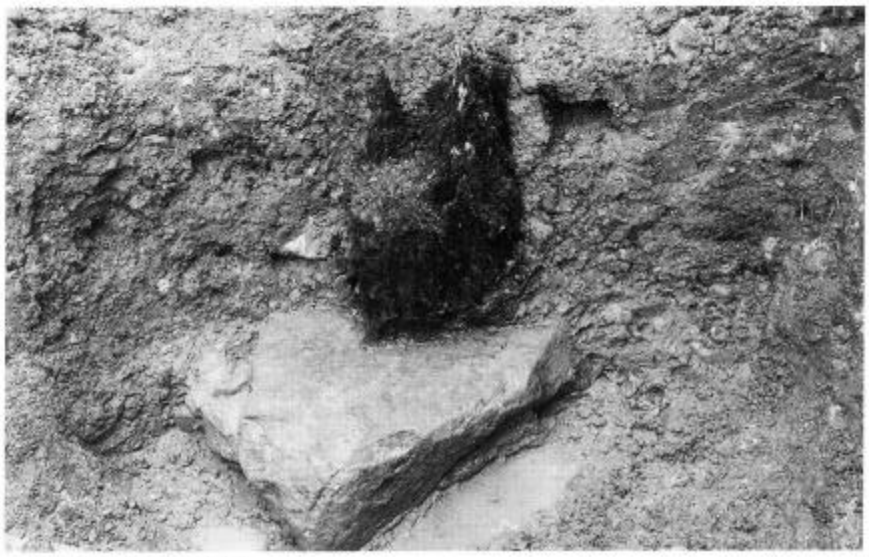
図版 3

表門跡（北西→）

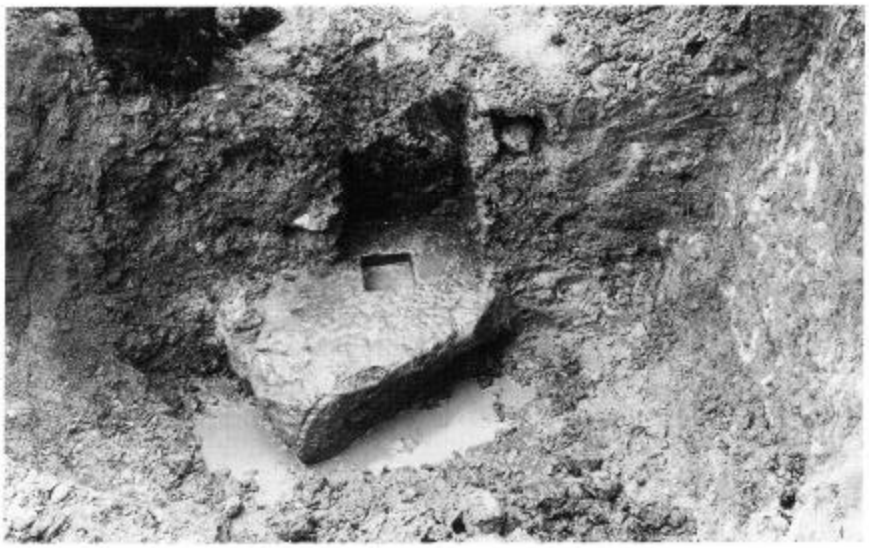
表門跡掘り方No.1

表門跡掘り方No.1

図版 4



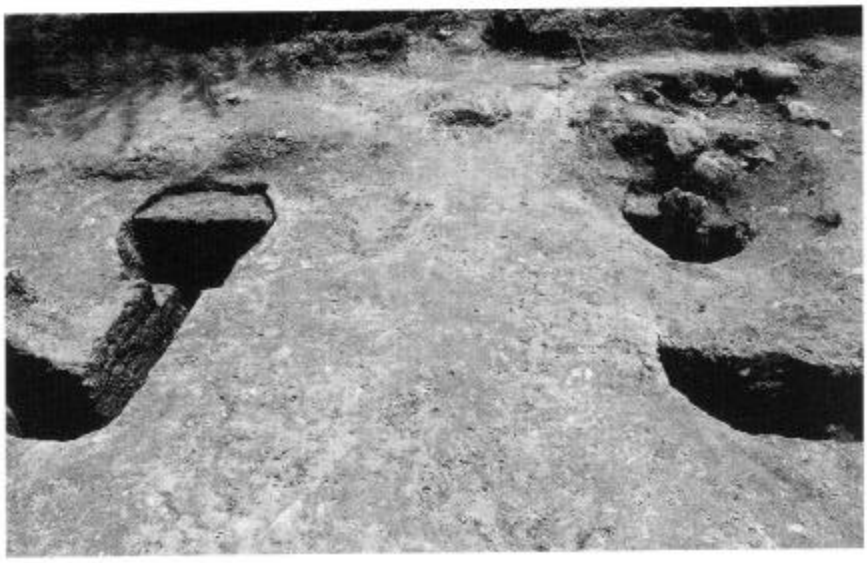
表門跡掘り方No.1礎石



表門跡掘り方No.1礎石

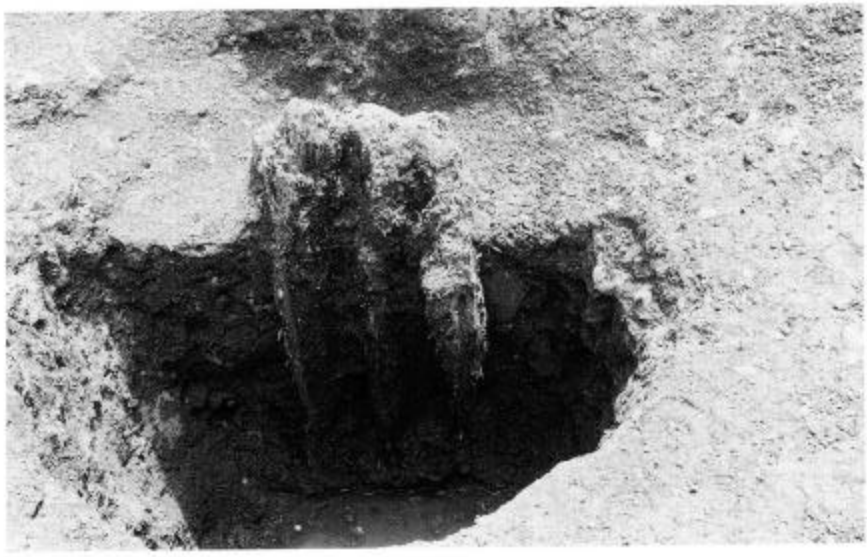
表門跡掘り跡No.2礎石

図版 5



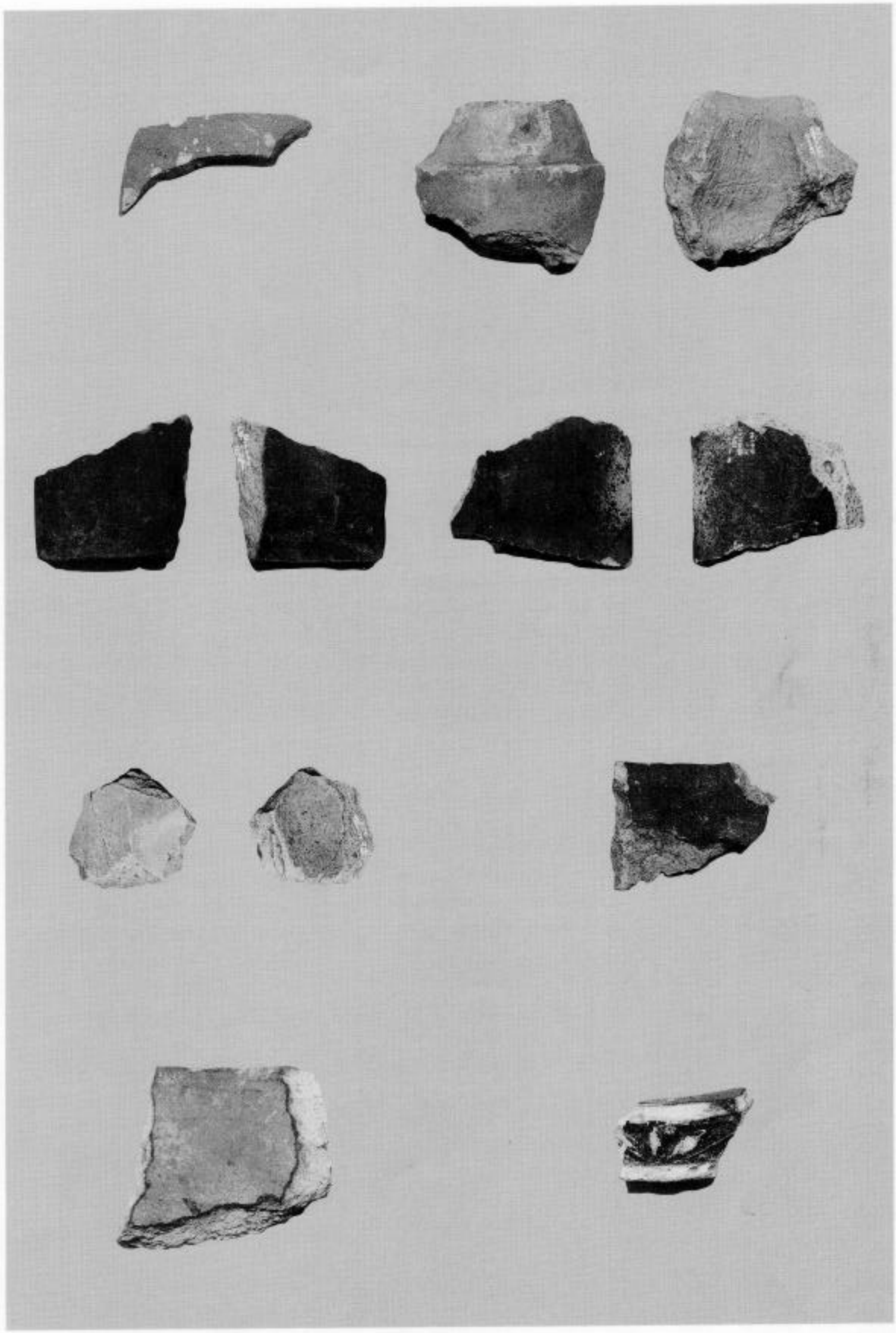
表門跡(旧)（北西→）

表門跡(旧)（南西→）



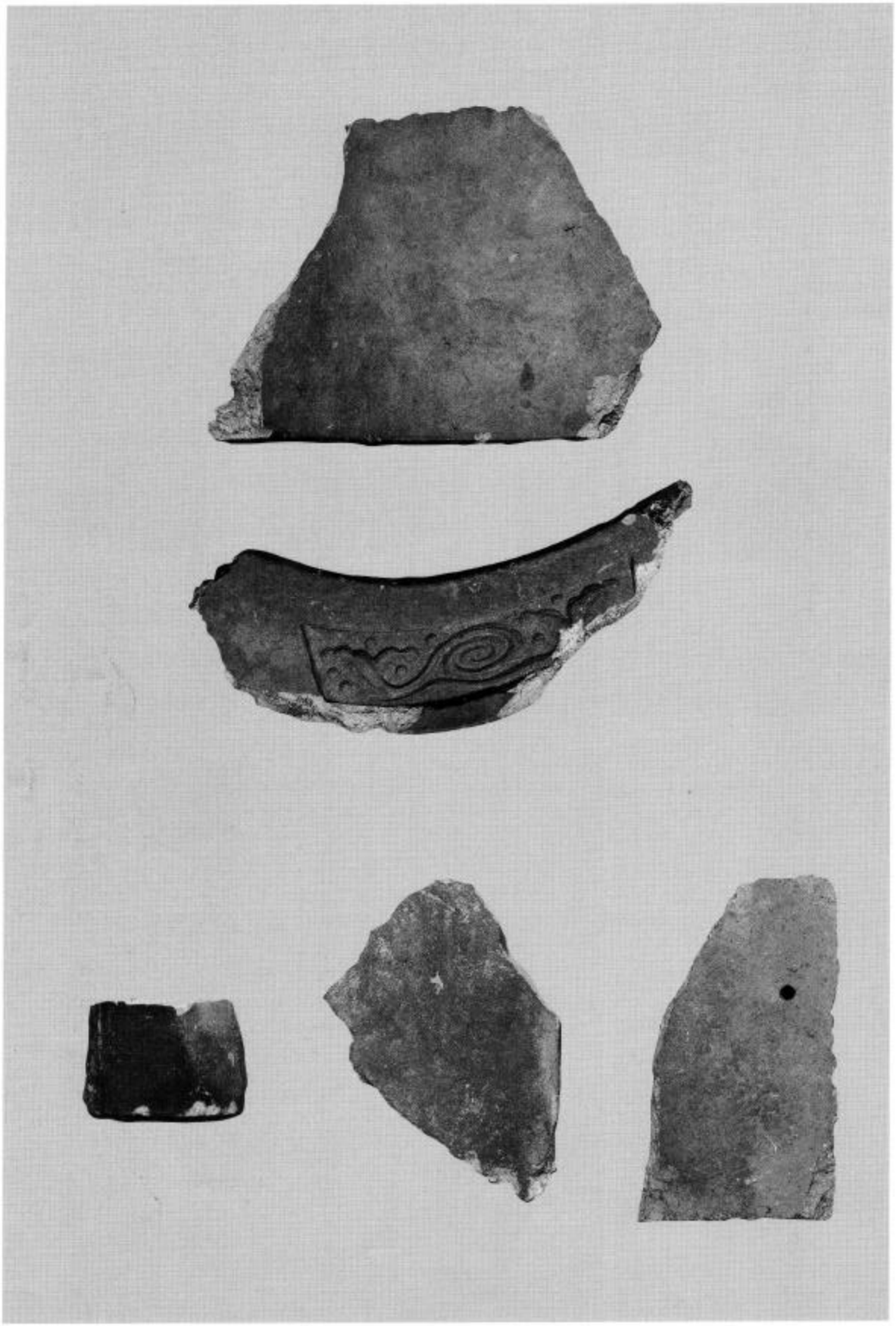
表門跡(旧) P 2

図版 6



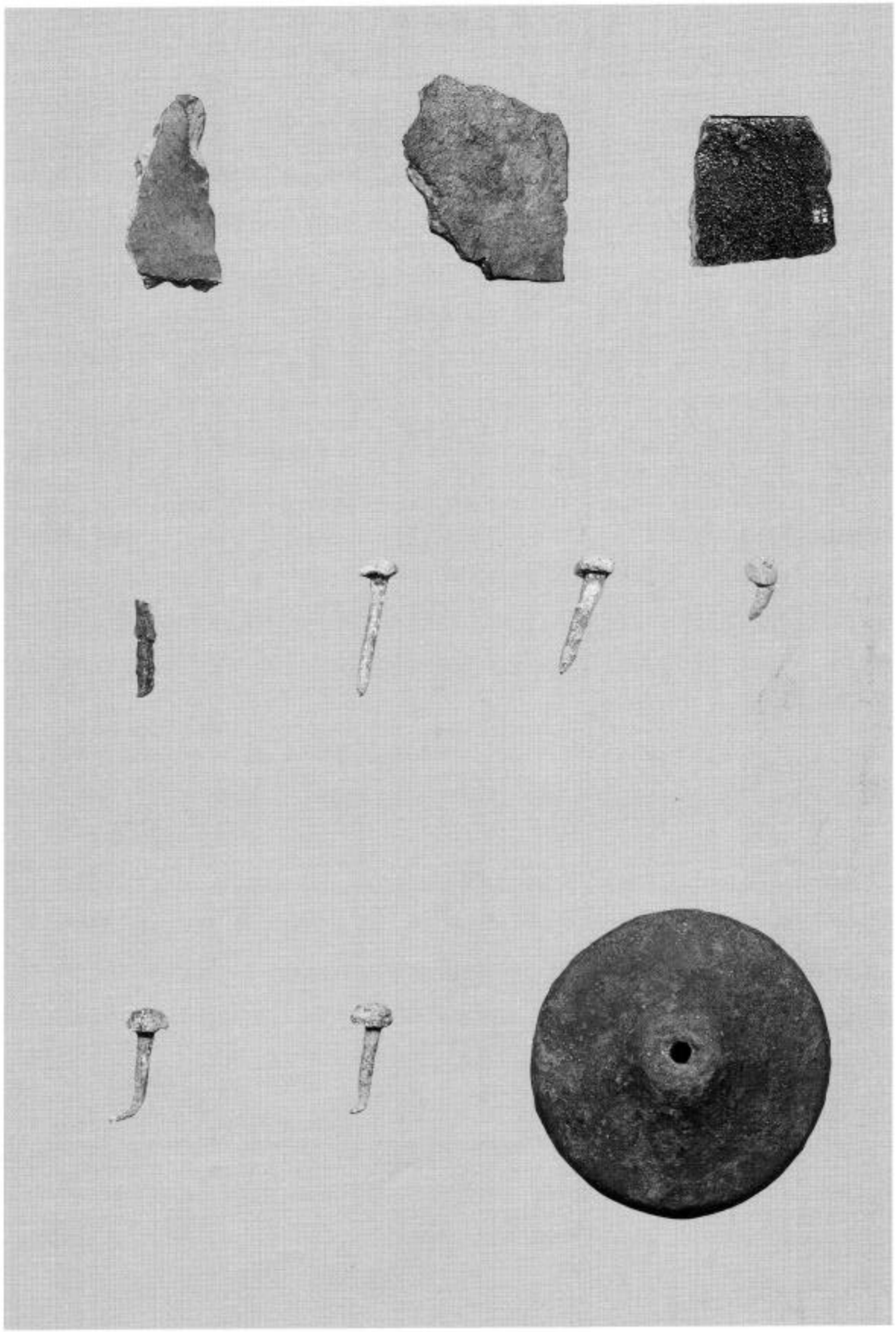
出土遺物（1～8）

図版 7



出土遺物（9～12）

図版 8



出土遺物(13～22)

図版 9

報告書抄録

ふりがな	くぼたじょうあと
書名	久保田城跡
副書名	表門復元に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	安田忠市、伊藤武士、中川宏行
編集機関	秋田市教育委員会
所在地	〒010－0951　秋田県秋田市山王二丁目1番53号　　TEL　018－866－2246
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
くぼたじょうあと 久保田城跡	あきたしせんじゅうこうえん 秋田市千秋公園	05201	217	39度 43分 10秒	140度 7分 37秒	20000508～ 20000516	約200	表門復元に伴う工事立会

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保田城跡	城郭	近世	門跡　2棟	陶器・瓦・金属製品	

秋田市
久　保　田　城　跡
－表門復元に伴う発掘調査報告書－
平成13年3月
編集・発行　秋田市教育委員会
印　　刷　秋田活版印刷株式会社